

だされ、その図像は写本挿絵としてのこされている。装飾模様
の枠に縁取りされた四角のなかに、銀色と金色の二重の円があ
り、その中央にブルー一色で塗られた人物が両の手のひらを前
に出して直立している。ヒルデガルトの幻視に基づき銀色の光
と紅い(金色)炎がブルーの人物を囲むような円となっており、
これが父、聖霊、子の三位一体を示す。子であるキリスト
だけが人物像として描出されており、神と聖霊のペルソナは人
格化(擬人化)されずに光と炎の充満として体験される。キリ
ストのみ人物として表し、なぜ神を人物像として描写せず銀色
の光の円(聖霊は金色・紅色)としたのかということは、神の
描写に関する図像学において特異であるが、これは『スキヴィ
アス』全体の構想、構成をあわせて考える必要がある。この三
位一体のモチーフは他のヴィジョンにも見いだされ、この前
の箇所では明るく照り輝き火炎は、全能の生ける神であり、生
き生きとしており初めと終わりがなく分割しえない、消滅する
ことがないといわれている。このようにヒルデガルトのヴィジ
ョンに特有の神のとらえ方があり、それが視覚化されているの
である。

三位一体という教義に女性性もしくは母性は含意されていな
いと思われるが、これが視覚化された場合、他のモチーフとの
組み合わせなどによって本来の教義にさまざまな解釈が加え
られ、女性性のイメージが読み取れる場合もある。たとえば
「シユラインの聖母子像」という彫刻があるが、そのなかにイ
エスを抱く聖母マリアの体内に「恩寵の座」が内包されている
ものがある。そこからは、マリアの身体をとおして受肉と三位

一体が具現化されているとみなすことができ、三位一体のみな
らずキリスト教の救済史全体が表現されていると解釈できる。
また三位一体と聖母の戴冠とが結合した図像もあり、図像化に
よって三位一体に対する受容、解釈がより具体的になっている
例もある。さらに、三位一体とピエタとの組み合わせもあり、
神のひとり子の死を悲しむ父という内容が前面に出ている作例
もある。さまざまな図像の作例をみてゆくなら、教義の視覚化
が教義の解釈の歴史であるということができよう。

愛の観想

——サン・ヴィクトール学派における交わりの神学——

中村 秀樹

十二世紀西ヨーロッパにおいて、キリスト教信仰の捉え直し
を試みた霊的共同体の一つにパリのサン・ヴィクトール修道院
がある。当時の最も優れた教育機関の一つであったその付設学
校の代表的神学者フーゴー(Hugo de Sancto Victore 一一四
一年没)と後継者リカルドゥス(Richardus de Sancto Victore
一一七三年没)の根本的問題関心は、歴史における神自身によ
る救済の理解として信仰を反省的に捉えること、信仰とその理
解の基盤である聖書の読解を方法論的考察と共に徹底するこ
と、そして愛における信仰の実りを重視することにある。その
思想は十二世紀の知的・宗教的状況の中でのキリスト教神学の
自己確認であると同時に、キリスト教信仰が開く交わりについ

ての根本洞察を含んでいる。

フーゴーは、信仰がキリストの言葉を聞くことにのみその端緒を持つこと、またそれが神認識として一切の自然本性的認識を圧倒的に凌駕することを強調する。信仰は何らかの他の認識から論理的に導出され、信仰の外から基礎付けられることはできない。信仰は、ただ神の霊によつてのみ与えられ、それによつて救済の真理は確証される。この救済の真理の伝承の中心にある聖書の読解をこの学派は重視し、多層的霊的読解の体系的構築を試みた。特にリカルドゥスの観想論はその完成態を示している。観想の要件として重要であるのは、信仰者の愛が神へ向かう力・徳 *virtus* として秩序付けられることである。これにより認識は、方向性なく彷徨う思考 *cogitatio* から神への愛に導かれる黙想 *meditatio* に移行し、本来的神認識と聖書の霊的読解が可能となる。それ故、黙想においては聖書の学びに基づく霊的認識とさらなる徳の形成は相互に補完しながら深まってゆく。その最終段階は、信仰者が御子の似像としての自己の姿を見抜く自己認識である。

信仰者の自己認識が原像である神の認識との補完性の内に十全なものとなる時に、黙想は最高次の精神の遂行である観想 *contemplatio* へ移行する。観想者は、自己が根底から神への愛により構成されていることを深く自覚し、愛の内に神と自己を含む一切を認識する。観想の頂点において恵みが与えられるなら、観想者は脱我 *extasis* へと導かれ、神自身へと奪い去られる。脱我は、認識の及ばないところへ向かう愛の力により原因され、その本質は神自身との愛における一致である。この愛

による神との一致の経験は、観想者を愛する者に従うよう内的に駆り立て、彼は愛する者の示した愛の姿、すなわちキリストのへりくだりの姿に参与することを、自己の根本規定とする。このキリストの愛に与えることを通して三位一体の愛の交わり *communio* に招き入れられることに、神の愛による人間の救済は存立する。この愛に与り、それを生きることは、その愛に出会う全ての人々を、同じ愛の交わりへ招くことを可能にする。己を無にして愛し合う交わりへの招きは、人間として持ち得る最も優れた普遍的で開かれた愛への招きである。この愛の交わりにおいてこそ、神の似像である人間に世界内において与えられ得る完全性は見出されるからである。

救済史の反省的理解から出発するサン・ヴィクトール学派の神学は、開かれた交わりへの可能性を閉ざすようにも思える。だが信仰を深める試みが、救済の根拠である愛自体に導かれ、黙想による聖書の霊的読解を通して愛をより深く知り、観想における愛そのものとの一致の経験へと至るならば、むしろその愛は自らが最も普遍的で開かれた姿を持つ交わりへの招きであることを示す。救済の核心にある愛が、人間に対しどのようにつながれたのかを、その歴史的に規定された根拠との関わりにおいてまず徹底して学び、それを自らの立脚点から現実に生きようとするのが、その愛に基づく普遍的に開かれた交わりを可能にする。ここにフーゴーとリカルドゥスの中心的洞察の一つがあるのである。